

論文要旨

ペルシャ語児の使役構文の習得

—使用依拠アプローチの観点から—

The Acquisition of Persian Causative Constructions

-A Usage-based Approach -

ギアアーイー・レイラー

1. 問題提起、本研究の背景と目的

幼児は、その母語を問わず、ある段階で使役の概念とそれを表す言語的手段を習得する。使役動詞の意味を理解するためには、使役イベントを分解し、ある特定の部分（行為）のみの類似性の有無に注目し、物体の類似性を無視しなければいけないので、物体を表す名詞的概念に比べて習得プロセスが複雑であることが予測される。したがって、母語とする言語に関係なく、「使役」の概念を理解するのは、幼児にとっては非常に困難であると言える。それにもかかわらず、就学前の幼児は、「使役」の概念を言語によって描写できるようになる。

日本語児をはじめ、使役動詞の習得に関する研究が数多く存在する一方、ペルシャ語児の動詞の習得の研究自体は殆どない状態に近く、研究の余地が多く残されている。

こうした問題を踏まえつつ、本論文では、ペルシャ語児は、言語習得が進む初期の段階で「使役」の概念を描写するときは、どのような描写方法を利用するのかについて論じ、次に幼児がある程度「使役動詞」を獲得した上で、「使役」の様態を描写するときは、どのような誤用を犯してしまうのか、そしてそのような誤用はなぜ起きるのかを考察する。幼児は、各グループの使役動詞の抽象化の低いスキーマを形成した後、本来ならば大人の言語とは全く違う動詞が発話される場合でも、自分特有の抽象度の低いスキーマを過剰一般化し、大人の言語にもない新規な動詞を発話してしまう。本研究では、ペルシャ語児の年齢ごとの使役動詞の誤用パターンについて論じ、使役動詞の獲得を使用依拠アプローチから考察していく。

ペルシャ語の使役動詞の4つの種類の中、一番発話頻度が高い使役動詞は、助動詞使役動詞である。これは定着度が高いゆえに、一番最初に出現する使役動詞も、一番早く誤用が無くなる使役動詞のグループもこの種の使役動詞だと予想される。本論においては、ペルシャ語児の横断的発話データ及び縦断的発話データを観察し、子供が最初に習得する使役のタイプは言語全体の中で定着の度合いの高い助動詞使役なのかどうかを考察していく。

更に、論文の第5章においては、7歳までのペルシャ語児の使役動詞の誤用を除去する二つの仮説、つまり Pinker (1989) の意味的な動詞のクラス仮説(Semantic Verb Class Hypothesis)と Braine & Brooks (1995)や Brooks *et al.* (1999) が提案した定着仮説(Entrenchment Hypothesis)を考察していき、ペルシャ語児の発話データに関して、誤用を除去する適切な仮説であるかどうかを明らか

にする。

本論文の最終的な目的は、幼児がその母語を問わず、「使役」の概念を獲得し、言語化していくためには、普遍文法が必要かどうかを明白にすることである。もちろん、使役の概念を獲得するためには、周りの人間（養育者）のインプットが非常に大きな役割を果たしているが、それは全てであるかと言えば、必ずしもそうではない。幼児が「使役」の概念を把握し、表現するためには、認知能力の発達が必要である。幼児は非常に早い段階から自分自身の行動に興味を示し、自分がある物体にどんな変化をさせることが出来るのかに興味深く観察する。次の段階においては、幼児は周りの人間の行動などに注目するようになる。このような根本的な情報に基づき、幼児は周りの人間の動作を最初に非言語的にカテゴリー化していき、次に周りの大人はそのような動作をどのような動詞によって描写しているかに注目するようになる。つまり、本論文では、生成文法で言われている普遍文法の助けなしで、幼児は身体による知覚と認知能力の発達によって使役の概念を理解し、またそれを言葉によって描写できるようになるかどうかを考察していきたい。本稿の目的は大きく分けて、次の5点にある。

- (1) I. ペルシャ語児の使役動詞の獲得で見られる発達段階を考察すること。
- II. 「使役」の概念が使役動詞によって発話される前の段階における描写方法の重要性を明らかにすること。
- III. ペルシャ語の3つの種類の使役動詞のグループでどのグループが最初に発話されるようになり、またどのグループの誤用が最初に無くなるのかを明らかにすること。
- IV. 幼児が使役の概念を描写するときは、使役の「様態」を重視するのかそれとも使役の「物体=道具」を重視するのかを考察すること。
- V. 「使役」概念の獲得の手がかりになる意味素性の把握、及び使役動詞の誤用を無くす主な制約を明白にすること。

2. 結果

具体的には、本論においては、CHILDESのペルシャ語児5人及び実験対象98人のペルシャ語児(2;0.12~6;11.19)の29個の使役動詞の発話を考察し、ペルシャ語児は、使役行為を言葉によって描写するに当たっては、以下のような発達段階を経過することが分かった。

- (2) I. 描写的ジェスチャー+*injuri kaerdæn* 'do like this'及び新規な擬態語+*kaerdæn* 'do'
- II. (使役構文の道具/形容詞/語彙的使役動詞の過去分詞形)+*kaerdæn* 'do'
- III. 使役動詞の代わりに自動詞そのままの発話
- IV. 適切な語彙的使役動詞や助動詞使役動詞の生産的な発話
- V. 形態的使役動詞の代わりに語彙的使役動詞や助動詞使役動詞の発話
- VI. 場面に適した形態的使役動詞の発話

本研究を通じて分かったもう一つの事実は、次のとおりである。幼児は他者の行為や物体の自己移動や使役移動を注意深く観察し、行為の *dynamicity* (動性)、*punctuality* (瞬時性)、*telicity* (限界性) (DPT 属性) という 3 つの素性に初期段階から敏感であり、前言語的段階においては、他者の行為や物体の自己移動や使役移動をカテゴリー化していき、Vendler の 4 種類の語彙アスペクトに相当するカテゴリーを形成する。しかしながら、一つの語彙アスペクトに属する動詞の間では、区別を想定しないため、誤用が犯されてしまう。本稿においては、幼児は、新動詞の意味を DPT 属性により理解できると主張した。更に、このモデルのことを、「DPT 属性による新動詞の獲得」と呼ぶことにした。ペルシャ語児は、使役動詞の概念を DPT 属性に基づいて、獲得していくが、「到達 = 状態変化」動詞という語彙アスペクトに属する 3 つの使役動詞のグループの獲得時期にずれがある。ペルシャ語児は、初期段階においては、「到達=状態変化」動詞を描写する時は、自ら表現したい動詞が表す行為を描写的ジェスチャーでやって見せ、同時に *intori kaerd* や *injuri kaerd* などと発話する。描写的ジェスチャーとは、身体の動きと指示対象との間の類似性に基づいて表現をするジェスチャーであり、指示対象が動作または空間的な出来事や状態の場合に用いられる表現手法である。描写的ジェスチャーとをすることによって、身体の動きと指示対象、この場合は動作との間の類似性が非常に密着な関係にあるから、ペルシャ語児も描写的ジェスチャーを利用することによって、自分の意図を簡単に聞き手に伝えることが出来る。*kaerdæn'do'* という軽動詞も非常に早い時期から獲得されるため、「描写的ジェスチャー+ *injuri kaerdæn*」というストラテジーは、ペルシャ語児にとって、自分の発話意図を聞き手に伝える非常に単純な方法だと考えられる。従って、2 歳 8 ヶ月以下のペルシャ語児は、様々な使役動詞を描写する時は、非常に幅広くこのような発話をしてしまう。一方、日本語児において「描写的ジェスチャー」の役割を担うモノは、「擬態語」であるため、まだ様々な動詞を不自由なく使えるようになっていない幼児は、非常に幅広く、「擬態語+する」を使ってしまう。勿論、日本語児も、自ら表現したい動詞が表す行為を描写的ジェスチャーでやって見せ、同時に「こうする」や「こうして」などと発話するが、その割合は、ペルシャ語児と比べ物にならない。同様に、ペルシャ語には、擬態語の数がそもそも指の数に収まるような数であるが、3 歳以下の幼児は、自分の発話意図を聞き手に伝えるためには、大人の言語にも存在しない「新奇な擬態語」を形成し、それに *kaerdæn* を結合することによって、話し相手に自分の意図を伝えようとするが、その割合は、日本語児と比べ物にならない。従って、新規動詞を獲得するに当たって、ペルシャ語児は、非常に幅広く「描写的ジェスチャー」を利用する一方、日本語児は、「擬態語」を利用することが言える。

ジェスチャーや擬態語は語彙獲得が増大する前段階でも見られることから、幼児が観察する事象の DPT 属性を把握する補助あるいは一種の *bootstrapping* になっているのではないかと考えられる。今井と針生(2007)の音象徴ブートストラッピング仮説は、ペルシャ語児の場合でも当てはまると言える。ペルシャ語児と日本語児のジェスチャーや擬態語の DPT 属性の把握における補助の役割は、両方の言語でも見られているが、その割合は異なる。日本語児の場合は、事象の DPT 属性を把握する大きな役割を担うのは、擬態語である一方、ペルシャ語児の場合は、その

役割を担うものは、描写的ジェスチャーであると考えられる。

軽動詞の獲得年齢も指示代名詞の獲得年齢も日本語児の場合でもペルシャ語児の場合でも大体同じ時期に行われ、「描写的ジェスチャー＋指示代名詞」＋「軽動詞」という組み合わせがあるならば、理論上、「描写的ジェスチャー＋軽動詞」のみの発話も十分考えられる。しかしながら、実際ペルシャ語児あるいは日本語児の発話データを考察することによってこのような発話例が見当たらない。このような発話が見当たらない理由について今後考えていきたい。